

第3回高校生カンボジアスタディツアー

杉並ユネスコ協会青年部

八尾 成美

夏休み中の8月2日(火)から8月12日(金)まで、日本ユネスコ協会連盟主催で行なわれた高校生カンボジアスタディツアーに参加してきました。日本全国から集まった高校生10名でカンボジアへ行き、現地の方との交流を通じて、カンボジアの歴史、文化、社会への理解を深めることができました。また、「世界寺子屋運動」「世界遺産活動」のプロジェクト地を訪問し、現在のカンボジアが抱えている課題を学び、その問題を解決する様子を見学・体験し、自分たちに何ができるのかを考えました。ここでは、私が訪れたカンボジアの様子とツアーの内容について紹介したいと思います。

1. カンボジアの基本情報

言語：クメール語

通貨：リエル (4000 リエル=1\$=約100円)

※ドル札を使うことができ、リエルはドルのコインとして使われている。

人口：1513万人

宗教：仏教(90%)、キリスト教、イスラム教



2. カンボジアの歴史

- 19世紀 アンコール王朝時代
- 16世紀 アンコール王朝滅亡
- 17世紀 カンボジアは弱体化し、タイ、ベトナムなどの隣国に支配される
- 19世紀末 フランスに植民地支配される
- 1953年 フランスから独立
- 1970年 ロン・ノル政権
- 1974年 ポル・ポト政権*
- 1979年 プノンペン政権
- 1993年 新生カンボジア王国

*ポル・ポト政権

カンボジアには悲しい歴史があります。1974年から始まったポル・ポトによる支配によって、200万人の市民が殺害されました。ポル・ポトが平等な社会の実現を目指す一方で、医師、教師、建築家、僧侶などの知識人と呼ばれる人たちが、拷問などを受けたのち殺害さ

れました。ポル・ポトは教育など必要ないと考え、学校を壊し、教師を殺害し、教材を焼きはらい、それまでの教育基盤を破壊しました。また、都市部に住んでいる人々を農村部に移住させ、自給率の向上を目指しましたが、かえって大量の餓死者を出し、最後はベトナム軍に攻め込まれ、政権が崩壊することになりました。その結果、知識人を失ったカンボジアは、国を再建するために大変な苦勞を強いられることになったのです。

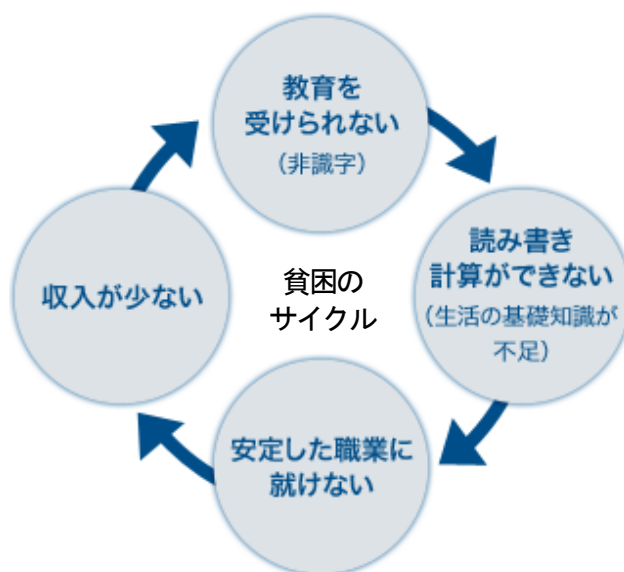
3. カンボジアの教育制度

カンボジアはポル・ポトの支配により、知識人が極端に少ないという問題を抱えています。また、学校や教師も十分に足りておらず、小学校と中学校は義務教育であるにも関わらず、依然として就学率の低い状況が続いています。

学校などが不足していることから、授業では二部制が導入されています。ある生徒は午前中に勉強し、ある生徒は午後に勉強するという方式が採られています。学習時間を十分確保できているわけではありません。

*世界寺子屋運動

発展途上国においてよく見られる、貧困による負の連鎖は非常に大きな問題です。教育を受けられないことで、読み書き計算ができないまま育ってしまい、本人はもちろんその子供も教育を受けることができないという、「貧困のサイクル」(下図)が続いていってしまいます。このサイクルを断ち切るためには、問題の根本にある教育を受けられないという状況を変える必要があります。そこで、日本ユネスコ協会連盟は発展途上国に寺子屋=CLC(コミュニティー・ラーニング・センター)を建て、現地の方を対象として識字教育や職業訓練を行っています。前述したように、教育制度がゼロの状態から国の再建にとりかかっているカンボジアには、この寺子屋による教育は最適の制度だと思います。



4. スタディツアーの行程

8月12日	成田空港ホテル集合	
8月13日	自己紹介 カンボジアについて学習 事前学習の発表（教育、歴史、 伝統文化、生活、世界遺産）	
8月14日	カンボジア（プノンペン）へ出国	
8月15日	在カンボジア日本大使館訪問（後述の5(1)参照） UNESCO プノンペン事務所訪問（後述の5(2)参照） ツールスレン博物館見学（後述の5(3)参照） 国立博物館見学	
8月16日	キリングフィールド見学（後述の5(4)参照） プノンペンの北にあるコンポントムへ移動	
8月17日	サンボー・プレイ・クック遺跡見学（後述の5(5)参照）	
8月18日	サンボー・プレイ・クック遺跡発掘体験（後述の5(5)参照） コンポントムの北西にあるシェムリアップへ移動	
8月19日	バイヨン寺院修復体験（後述の5(6)参照） アンコールワット見学（後述の5(7)参照）	
8月10日	日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所訪問（後述の5(8)参照） リエンダイ寺子屋訪問、交流（後述の5(9)参照） 夜間識字クラス見学（後述の5(9)参照）	
8月11日	シェムリアップより日本へ出国	
8月12日	帰国	

5. 訪問先の紹介

(1) 在カンボジア日本大使館

特命全権大使である隈丸優次氏に、大使の仕事内容や日本とカンボジアの関係などについてお話を聞きました。日本はカンボジアに対し、衛生面や下水施設などで技術提供や財政的な援助を行っています。また、学校も多数建設しており、カンボジアにある小中学校 8000 校のうち、1000 校を日本政府が建設しています。大使の言葉の中で印象的だったのは、「日本とカンボジアをゴムに例えると、日本は伸びきったゴムで、カンボジアはまだまだ伸びるゴムのように感じる。そのような国での仕事はとてもやりがいがある」とおっしゃっていたことでした。カンボジアは将来が期待される発展途上国です。日本も負けてはいられないと感じました。



▲隈丸大使（中央）との記念写真

(2) UNESCO プノンペン事務所

プノンペンにある UNESCO の事務所では、UNESCO の文化・教育活動について説明を受けました。カンボジアにはアンコールワットという世界遺産がありますが、その修復や研究を他の国に頼っているというのが現状です。人材育成が追いついていない点などの問題を克服することが、カンボジアの今後の課題だそうです。



▲プノンペン事務所での記念写真

(3) ツールスレン博物館

UNESCO 記憶遺産にも登録されているツールスレン博物館は、ポール・ポトの統治時代に捕らえられ収監された人々の収容所として使われていました。元は学校であり、鉄棒などの遊び道具も拷問の道具として使われていたという事実には衝撃を受けました。また、収監されていた方の血などが地面に残っており、ここで 40 年前に悲惨なことが行われていたということを実感しました。

(4) キリングフィールド

キリングフィールドとは、ツールスレンの収容者が連行され、殺害された場所です。殺害は毎晩行われていました。ポール・ポトは自身の行為が周囲に知られないように、人が滅多に立ち入らない元中国人墓地であるこの地を選んだそうです。ポール・ポト統治時代が終わり、

しばらく経ったのち、地元の人が偶然立ち入ったところ多くの人骨が発掘されたことから、この地の存在が明らかになりました。被害者の方の服や骨などが今でも地面に残っており、最近の出来事だということを改めて感じました。

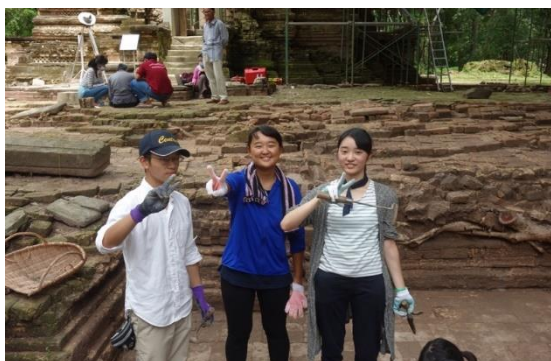


(5) サンボー・プレイ・クック遺跡

コンポントムにあるサンボー・プレイ・クックの遺跡群。カンボジアで3つ目の世界遺産に登録されるかどうか注目されています。自然と融合した遺跡である点が特徴で、カンボジアの他の遺跡とは建築様式が異なる点も注目すべきポイントです。世界遺産登録にむけた動きがある一方で、遺跡について未だ明らかにされていない部分が多く、私たちがカンボジアに滞在している間も、日本の早稲田大学の研究チームとカンボジアの大学のチームが合同で発掘調査を行っていました。

▲遺骨が安置されている建物の前にある献花台に、献花とお線香をあげてきました。

見学した次の日には私たちも発掘体験をさせていただきました。現地の研究チームは約2週間の調査を行い、そこから発見できることはA4の紙で2行分ほどだそうです。しかしこの積み重ねが日本の歴史や世界の歴史の解明につながっているということを実感しました。



▲遺跡の発掘現場



▲遺跡が発掘されると、採掘した場所の縦、横、高さを正確に測定します



▲発掘チームの方々との記念写真



▲左はカンボジアの大学教授の方。現場で不足する軍手をプレゼントしました。

サンボー・プレイ・クック遺跡を案内していただいた吉川さんが、世界遺産に登録されると遺跡の修理や保全にかかるお金は増えるが、現在ほど近くで遺跡を見ることはできなくなり、またこれらの遺跡を信仰している地元の方の生活を崩すおそれがあるため、登録されれば良いというわけではないとおっしゃっていました。「昔の人の生活の上に、今の人たちの生活が乗っかっているということを忘れてはいけない」という言葉が特に印象的でした。



▲▶ 現地の高校生と一緒に遺跡を見学しました。



(6) バイヨン寺院修復体験

アンコール遺跡群の1つであるバイヨン寺院で、JASA というアンコール遺跡の修復を専門とする日本の団体が修復活動を行っています。新しく建て直すのではなく“修復”という点がポイントで、できるだけそれまで使われていた石材を利用するようにしています。

建設された当時は石を積むのみで接着剤などは使われていませんでしたが、現在はできるだけ石材に負担をかけないような接着剤を開発し使用しています。私たちも修復活動を手伝わせていただきました。この修復現場で働く方たちの中には寺子屋出身の方もいらっしゃるようで、カンボジアの人材育成を手助けしていることを感じることができました。



私たちに修復事業を説明して下さったチア・ノルさんのお父さんは医者で、ポル・ポト時代に殺害されてしまったそうです。ポル・ポトの大量殺戮は遠い過去の出来事ではなく、このように被害者の家族が今でも身近にいるということを実感させられました。



▲チア・ノルさん（左）の説明を受けている様子

(7) アンコールワット

“カンボジア=アンコールワット”と言ってもよいほどの有名な世界遺産。カンボジア人のガイドさんが「昔のカンボジアはすごかった」と何度も言うように、アンコールワットの中心に立つと、東西南北が私の持っていたiPhone とぴったり合いました。



そのようなアンコールワットですが、世界中からは世界遺産の悪い例として見られています。損壊部分の多いアンコールワットは修復することが必要不可欠ですが、修復する人材が国内にいないため、他の国々、特に日本やフランスに頼らざるを得ないのが実情です。「修復オリンピック」と言われるような、世界各国の修復技術の腕の見せつけ合いの場にもなっています。またその反対に、修復技術の不十分な国も関わるようになってきています。



▲道の左側の地面はボコボコになっており、インドが修復した箇所。修復技術が不十分な場合、何十年か後にはこのようになってしまいます。これから日本のチームが再度修復するそうです。

(8) 日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所

カンボジアにある日本ユネスコ協会連盟の事務所では、所長のブッタさんから同連盟が行っている世界寺子屋運動についての説明を受けました。支援を行うには地元の方との連携が不可欠で、また彼らが求めるプロジェクトを実施しなければ良い効果が得られないとのことでした。そのような現場の声を聞いて、支援の難しさというものを改めて感じました。



また、“支援”というものは永遠に行えるものではありません。現在 16 件ある寺子屋のうち 3 件に対して、金銭的な援助から卒業するためのサポートを 2016 年より開始しているそうです。そのようなプロジェクトにも注目していきたいと思います。



(9) リエンダイ寺子屋「復学支援クラス」交流

アンコール遺跡近郊のリエンダイ村にある寺子屋を訪問し、そこで勉強している子供たちの様子を見学させていただきました。その後、お互いの国のゲームで遊んだり、私たちが準備していった日本文化の紹介（そろばん、折り紙、歌）を行いました。授業を受けている子供たちの年齢はさまざまですが、皆勉強できることに喜びを感じているということが伝わってきました。私たちが日本から持参したおもちゃを見せると、「どのように使うの?」と積極的に話しかけてきてくれて、見たことのないものに対する好奇心が強いことに驚かされました。



▲授業を受けている子供たち。とても活気がありました。

◀日本のゲーム、カンボジアのゲームをそれぞれ紹介しあいました。これは「だるまさんが転んだ」をしている様子です。



◀日本からの勉強道具やおもちゃなどをプレゼントしてきました。

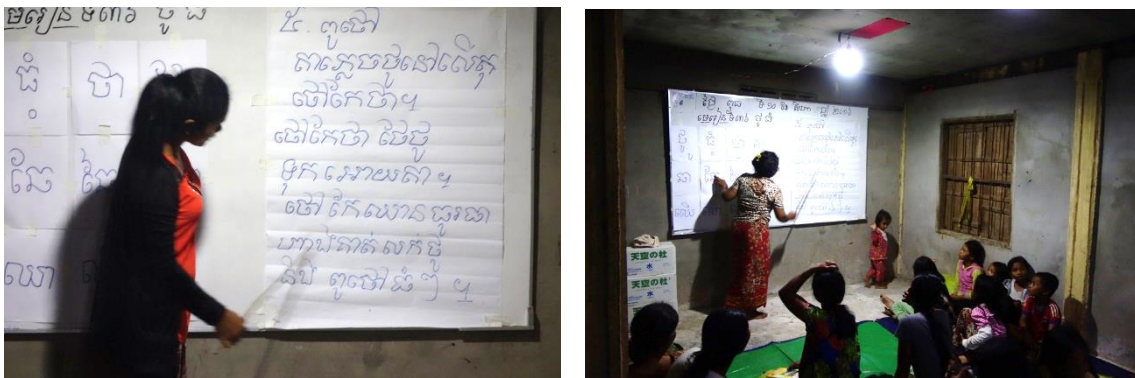
*生徒のお宅訪問

寺子屋に通っている女の子のお宅を見学させていただきました。ガイドさんによると、カンボジアの中でもかなり貧しい家庭とのことでした。家は高床式で、壁などの仕切りはなく、布で軽く仕切られている状態でした。寺子屋に通っている理由を尋ねると、家の仕事を手伝わなければならない、小学校をやめてしまったそうです。しかし、現在は制服や自転車、筆記用具などが日本ユネスコ協会連盟から支給されるため、寺子屋に通うことができるそうです。将来の夢は学校の先生になることと話してくれました。見ず知らずの私たちを温かく迎え入れてくれたカンボジアの方の、心の温かさを感じました。



*夜間識字クラス

夜の 7 時頃に夜間識字クラスが行われている建物に行くと、村の多くの方々が集まっており、とても賑やかでした。ここは学校に通えなかった大人の女性たちを対象に行なわれている識字クラスです。驚いたことに、先生は中学校までしか通っていないそうです。



6. 感想

“カンボジア=THE 発展途上国” これは私がこのスタディツアーに参加してさまざまなものを見て、聞いて、感じたことを、一言でまとめた言葉だと思います。参加する前までは“カンボジア=アンコールワット”くらいの知識しかなく、歴史や文化について全く知りませんでした。しかし事前学習などを経て、どうして自分がカンボジアに行くのか、その目的のようなものが明確になり、このプログラムに参加することができたと思います。発展途上国と呼ばれるような国に行くことは私自身初めてであり、テレビでしか見たことのない世界でした。カンボジアは発展途上国の1つという認識はあったものの、実際に訪れてみて、それはただ単に貧しいからという訳ではなく、歴史的背景から見て将来に期待することが

できる国だからだと思いました。ポル・ポト政権の悲惨な出来事を乗り越えて、教育基盤、社会制度などを含めゼロからスタートし、今まさに発展中だということを街の様子や人々の生き活きとした表情から感じました。

今回のスタディツアーに参加するうえで私が特に興味を持ったことは、カンボジアの教育についてです。カンボジアの教育制度は未だ十分ではなく、学校や教師の不足といった課題が山積しています。そのようなカンボジアで実施されている寺子屋運動。ブッタさんのお話を聞き、寺子屋運動について学べば学ぶほど、国際協力、また支援の奥深さを感じました。いつまでも支援し続けられるわけではない、だから彼らが自立できるように支援することが大切なのだということを実感させられました。実際に寺子屋を訪れてみて驚いたのは、普通の学校と変わらないように見えることです。私の最初のイメージは、必要最低限の物しかない狭い教室の中で授業をしているというものでしたが、異なる年齢の子供たちが同じクラスで学んでいることを除けば、普通の学校とほぼ同じです。またかなり多くの生徒が寺子屋で学んでいる様子を見て、「もしこの寺子屋が無かったら、この大勢の子供たちは十分な教育を受けられずに大人になってしまったら」と思われ、そのような厳しいカンボジアの実情を突き付けられたような気がしました。特に印象的だったのは、寺子屋で学ぶ子供たちに日本から持ってきたお土産を渡すと、とても好奇心にあふれた目で私に使い方を尋ねてきたことです。お互い言葉は全く通じず、ガイドさんを通さなければ会話ができなかったものの、何を訴えているかはお互いに感じ取ることができました。寺子屋で学ぶ子供たちの好奇心にあふれた姿勢が忘れられず、彼らのために常に何か新しいものに触れる機会を与えることが大切だと感じました。

最後に、このスタディツアーに参加して、カンボジアで出会ったさまざまな方から多くの刺激を受けて日本に帰ってくることができ、私の中で国際支援に対する気持ちが大きくなりました。一緒にこのツアーを作り上げた10名のメンバーからも、多くのことを気づかせてもらえました。私が出国する前に決めた目標である「現地で感じたことを自分の中に“吸収する”」。これからは吸収したことを発信していきたいと思います。